

Report on the Elementary Japanese Course of the Japan-Russia Ecotourism Program at Kanazawa University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Mine, Masashi, Yamada, Akemi, Viktoriia, Vovk メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062737

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践報告

金沢大学ロシア文化交流プログラムにおける 遠隔教育の試み

峯 正志^{注1}・山田 朱美^{注2}・ヴィクトリア・ヴォフク^{注3}

要 旨

金沢大学ロシア文化交流プログラムの初級日本語研修は、新型コロナウイルスのため、それまでの対面での実施から急遽遠隔でのオンデマンド方式による実施に変更を余儀なくされた。本稿はその際に生じたプログラム方針の変更、プログラム教材の作成、実施の方法を巡る問題点、プログラム実施後の評価アンケートの結果およびその分析についての報告である。アンケート調査により、オンデマンド方式で実施したにもかかわらず多くの学習者はプログラムのスケジュールに従い受講したことが分かった。また、本来はエコロジーの学習プログラムであるが、多くの学習者は日本語や日本文化に興味を持っており、このプログラムにおける日本語学習の必要性も確認された。また、教材の内容としては日本の日常生活の様子がよく分かる動画や会話例を多くすべきであることが示唆された。

はじめに

金沢大学のロシア文化交流プログラム(UNESCO Mt. Hakusan Biosphere Reserve Program for Russian Universities)は、ユネスコ生物圏保護区についての実地研修と初級日本語教育からなるプログラムである。プログラムの趣旨はユネスコ生物圏保護区(白峰地区)についての理解を深めることであるが、地元の人々との交流も含むプログラムであるため、最低限のコミュニケーションに必要な日本語を学習する日本語教育プログラムも取り入れている。この場合の「必要な日本語能力」とは、地元の人々と挨拶を交わしたり、簡単な自己紹介が出来る程度のコミュニケーション能力である。そのためのプログラム内容は4コマ^{注4}程度の対面型授業で、習った文型や語彙は大学周辺での買い物などですぐに使えるという前提で行っていた。

しかし、新型コロナウイルスによる感染症の広がりにより、2020年度は7月に直接

来日してのプログラムの実施が不可能となった。2020年10月現在まで収束の兆しはないが、2020年度の終了時(2021年3月)までに来日出来る可能性もあることから、当面の間、遠隔での授業を行い、年度末の来日へ備えた事前学習という位置づけでプログラムを実施することとなった^{注5}。

本稿は、急遽遠隔授業として行われることになった、エコプログラムにおける日本語教育プログラムの実践報告である^{注6}。

I. プログラム設計についての基本的考え方

I. 1 従来のプログラムとの変更点

ここではまず対面型で行ったこれまでのプログラムと、遠隔で行うプログラムの設計上の違いについて述べたい。

これまでの対面型プログラムの前提として、学生は来日して白峰村の人と自然に実際に触れあうということがあった。そのため、学生はその事前に白峰の自然についての講義と村の人たちとコミュニケーションをとる(もちろん4コマの授業のみでは内容は限られる)ための日本語学習が設定されているわけである。そこで基本的な方針としては、①挨拶など簡単なやりとりができるような内容にする、②文法は最小限に限り、実際の会話練習を多く行う、という形にした。そのため、語彙も実際に交流で使う可能性の高いものに限定することになる。また、日本語学習は午前中に設定されており、夕方はキャンパスを出て、買い物など実際に日本語を使用したり、日本人の暮らしぶりを観察したりする機会を持つことが出来るため、練習を中心としたこれまでのやり方にはそれなりの意味があったと言える。

しかし、来日せずに遠隔で授業を行うことになりこのような前提が全く崩れてしまった。つまり、地元住民との交流が予定されているとはいえ半年後のことであり、最悪の場合は来日が出来なくなる。そのため、習ったことはすぐに使えない。しかし、遠隔授業は対面授業より有利な点もある。それは、オンデマンド方式の教材を作れば、学習者は必要に応じて何度も繰り返し視聴出来るという点である。

このため、次のようなクラス設計の変更を行った。

- ①挨拶などすぐに使える単語、表現、文法より、日本語学習の基本になる語彙、文型の積み上げに重点を置く。
- ②来日までに自分で少しは日本語学習するために、日本語に興味を持つように工夫する。
- ③日本での生活やキャンパス生活が経験できないので、それを教材に盛り込んだ。

II. プログラム実施の問題点

II. 1 オンデマンド方式か同期型方式か

上で、オンデマンド方式について述べたが、遠隔授業としては、ビデオ会議ソフトを使用して、対面同様の効果を持つ同期型方式もちろん可能である。しかし、この金沢大学エコプログラムは、ロシアの6つの大学^{注7}を対象にしたプログラムであるため、それぞれの大学で時差が生じる。そのため、同期型で行うことが難しいという問題があった。しかし、例えば同期型が可能だとしても、1回きりの授業を4コマ行うだけでは来日までに忘れてしまう。同期型で行うにしても、その後の学習用のオンデマンド教材は必要になるのであるから、今回は最初からオンデマンド方式で行うこととした。しかし、後述するように、スケジュール通りに教材を閲覧した学生が多かったので、結果的に遠隔同期型に近い形で実施されることになった。

II. 2 教材の作成について

新型コロナウイルスのため、大学の授業が遠隔で行われることになった^{注8}が、多くの日本語教師にとって遠隔授業は初めての経験であり、そのためのネットやパソコンソフトの使用に慣れるのに大変な時間と労力をとられることになった。このプログラムの準備も例外でなく、他の授業を行いながらの教材作成のため、必要最小限のもので済ませることを余儀なくされた。そのため、メイン教材はpptファイルで作成し、Zoomで共有した画面を録画することで、ビデオ教材とした。また、それに大学紹介などのビデオ教材をつなげて一回分の教材とした。

II. 3 教材の概要

教材の内容は概略次のようなものである。なお、教材は、日本人教師が日本語で説明するが、画面下にロシア語の字幕が出る。また例文はひらがなとローマ字併記とした。

第一回目 名詞文(動画合計時間：27：19)

- ・日本語の音、挨拶、数字、この課で必要な語彙導入
- ・【文法】名詞文：AはBです。否定文、疑問文、AのB、～さい(年齢)です
- ・自己紹介練習パターンの導入 会話例の動画
- ・【応用】いくらですか？ ～円です。商品紹介のビデオ(大学生協の協力を得た)
- ・大学キャンパス案内ビデオ

- ・【課題】：学習した例文を使って、1分程度の自己紹介ビデオを各自スマホで作成し、アップロードする。

第二回目(動画合計時間：36：11)

- ・この課で必要な語彙導入
- ・【応用】会った人の名前を聞く、人に紹介してもらう(前回の復習もかねて)
- ・【文法】これ、それ、あれ、～はなんですか？
- ・会話例の動画
- ・ここまでの文法のロシア語での解説
- ・【文法】ここ、そこ、あそこ ～はどこですか
～は～にあります 位置名詞、一階、二階・・・
- ・ロシア語での文法解説
- ・時間の言い方 時、分、曜日、日付 いつ

第三回目 動詞文(動画合計時間：25：23)

- ・この課で必要な語彙導入
- ・【文法】自動詞文の導入 どこへ 行きますか
- ・助詞の導入 <乗り物>で、<人>と、<時間>に
- ・他動詞文の導入 ～を ～ます ません ました ませんでした
- ・<場所>で ～ましょう、いっしょに～ませんか
- ・【応用】会話ビデオ

第四回目 形容詞文(動画合計時間：45：29)

- ・この課で必要な語彙導入
- ・【文法】形容詞文の導入 イ形容詞 ナ形容詞 否定文、疑問文
どうですか
- ・【応用】会話
- ・【文法】～がすき、きらいです
- ・【応用】会話
- ・【文法】～が ほしいです
- ・【応用】会話

上述の方針に従い、わずか四回の授業ではあるが、このビデオ教材を視聴すること

で、名詞文、動詞文(自動詞文、他動詞文)、形容詞文の作り方が学習できるようにした。大事なことは、このプログラムの学生は日本語が専門の学生ではなく、初めて日本語という言語を学ぶ学生達であるということだ。だから、挨拶や簡単な会話ができることも大切だが、それ以上に日本語という言語の基本構造を学ぶ必要があると考えた。

また、来日出来ず、日本で生活を体験できない彼らに、町並みやお店の様子、大学キャンパスでの生活が少しでもヴァーチャル体験できるように、キャンパス紹介の動画や、ものの値段の紹介に大学生協を場面に取り入れるなどの工夫をした。これも日本に興味を持ってもらうためである。

なお、動詞文を一回で導入するのは一見無謀のように見えるが、オンデマンド方式で何回も好きなだけ繰り返し見られることを考慮すると、学習者にはそれほど大変ではないように思われる。主に理系の学生である受講生が、受講後に日本語の学習書を手に入る可能性は少ないと考えられるため、できるだけ多くの内容を盛り込んで彼らの学習に資するようにすることが重要だと考えた。

II. 4 教材作成上の反省点・問題点

この章では、このプログラムにおける日本語教材を実際に作成する上での問題点、および作成後の反省点を述べてみたい。

- (1) 動画を用いた教材作成に慣れていなかったため、オンデマンド用教材作成(教案作成、pptファイル作成、動画撮影、動画編集など)すべてにおいて非常に時間がかかった。回を重ねることに慣れてはきたが、かなりの負担であった。最初は1本につき10時間以上かかってしまった。このことは、あまり動画作成になれていない教師にとってオンデマンド教材を作るのは、通常の授業の準備とは質的に異なることを意味する。教材作成のための特別手当が必要となろう。
- (2) 無料の編集サイト^{注9}を使ったため、画質が悪く、音も一部飛んでしまった。
- (3) 文法導入の際の文法説明をどの言語で行うかは難しい問題であった。ロシア人教師がロシア語で行うことも可能だが、それは留学という雰囲気を台無しにしてしまう。やはり日本人講師が説明を行うべきであると考えた。しかしロシア語が堪能な日本人教師は簡単に見つかるわけではない。そこで、日本語教師は日本語で話し、ロシア語の字幕を入れることにした。しかし、スライドそのものに簡単な英語訳を入れた方がよかったかもしれない。ロシア語字幕があったとはいえ、字幕に注意を取られてしまう可能性がある。英語訳があれば、スライドの説明をそのまま理解することが出来るのではないか。
- (4) 文法説明だけで練習パートがあまりなかった。練習に特化した動画も作成する必

要がある。しかし、これは本編とは別に練習編を作るというやり方もあるだろう。

- (5) クラス設計の③で述べたように、実際に来日出来ない学習者に日本の生活やキャンパスライフに興味を持ってもらうために、教材の最後にキャンパス紹介の動画を挿入した(第一回目)。大学の公式HPにも動画や画像があるが、来日出来ない学習者のためには、実際にキャンパスや建物を散策しているような(ヴァーチャルな)動画の方がよいと考えた。
- (6) 教材の内容とは別に、新型コロナウイルスのため、共同作業がしづらい環境だったという問題もあった。そのため、どこにテロップを入れるべきかなどの打ち合わせが綿密にできず、必要な場面にテロップが欠けるなどの不備が生じてしまった。

II. 5 ロシア語のテロップおよび文法解説

動画作成のための必要作業は主として、編集とロシア語テロップを入れることである。1コマ分の動画編集の所要時間は、平均約5時間＝全部で約20時間であった。

テロップや文法解説をどの程度詳しくするかについては議論の余地があると思われるが、今回のプログラムでは以下の様に対応した。

第一回目の日本語授業動画を作成する際は、日本語初級レベル(ほぼすべてゼロレベル)の学生への初めての授業のため、その学生の母語であるロシア語のテロップは不可欠である。挨拶・人物の名前だけでなく、日本語の決まり文句、例えば、「いかがですか」「失礼します」なども簡潔に解説する必要があるため、読みやすさを考慮して最大3－4行までテロップを入れる作業を行った。そのほか、練習会話場面の説明や、これからやる課題のポイント(例:「これから言葉をリピートしてください」、「配布資料を見ながら言葉を読んでください」)などをはっきりとテロップで明示するのが極めて重要と考えた。

第二回目の動画では、テロップの数を減らし、挨拶や第一回目で登場する語彙を指すテロップをなくした。「段階的にヒントを減らす」が、オンデマンド授業を閲覧する時に復習動機を与えると考えた^{注10}。

テロップ以外にも、日本語表現のより深い学習が注目されるため、表現―決まり文句―の説明を入れる必要がある。第二回目では「お世話になります」という文句の意味と主な使い方を母語で解説し、日本人教師が説明を行った後に挿入した。ロシア語の場合、「お世話になります」という表現は、ロシア語では存在しているものの、現在では殆ど使われていないため(文学表現という認識が強い)、強調しなければならないポイントの一つとなる。

また、ロシア語説明の最後に、日本語の文章の特徴(ロシア語との違い)についても

解説した。

第三回目の日本語授業はロシア語説明なしで、テロップのほとんどない動画となっており、第二回目のところに触れた通り、「段階的にヒントを減らす方法」が、オンデマンド授業の際に授業内容の復習動機を与えると考えられるため、第三回目の動画を作成する時、会話の場面と課題のポイントを示す言葉だけを翻訳し、それ以外は、初級でもなるべく学生に日本語で日本語を勉強してもらうのを目的として動画作成を行った。従って、第一回目と比べ、第二～四回目のテロップは少なめである。

第四回目は第三回目と同様にテロップをほとんど入れず、相手になるべく日本語を日本語で理解してもらうのを意識しながら動画作成に臨んだ。ところが、第四回目の日本語教材内容は初級にとって難しく、また日本文化を知らないとうからないような表現がいくつか出てくるため、そのロシア語説明を挿入することになった。「結構です」、「いかがですか」、「そろそろ失礼します」、「またいらっしゃってください」、「ちょっと…」といった、文化的要素も含んだ表現が会話で出てくるため、それらのロシア語説明部分を挿入し動画を完成させた。

II. 6 課題について

研修後は、実際に日本語を使用する課題を設けた。

(第一回目終了時に) 1.1分程度の自己紹介ビデオを作成する。これは一人一人に対する課題である。

(第四回目終了時に) 2.5分程度の大学紹介ビデオを作成する。これは6大学それぞれで作成してもらい合計6つのビデオを提出させた。いずれの課題も皆真剣に取り組んでくれた。ただ、今回の4回の授業で学んだ語彙、表現を上手く使って作成することを期待したのだが、多少難しい語彙、文型などを用いて作成したものもあった。この日本語研修プログラムは単位を前提にしたものではないため、自由に作ってもらって結構なので特に注意することはしなかった。筆者らとしては、むしろ日本語に興味を持ち、一生懸命調べて課題に取り組んだ成果であると考えたい。

III. プログラムアンケートの実施と結果

プログラム実施後、プログラムの改善のために授業評価アンケートを9月11日～10月12日[B B 1]にかけてグーグルフォームを通じて行った。

プログラム参加者は25名で、そのうち21名から回答を得た。以下はその質問と回答結果である。考察についてはここではなく、次の章で行う。

1. 性別 男4名；女17名
2. 学部・専攻 哲学と法学の2名を除けば他はすべて生物学，地質学，エコロジーなどの理系科目であった。
3. 学年 省略
4. プログラムに参加する前，日本語を勉強したことがありますか はい4名 いいえ17名
5. プログラムに参加前の日本語レベルを示してください
問4で「はい」を選んだ学生が初級と答えた他はすべてゼロ初級と答えた。
6. プログラムに参加する前，日本語または日本文化に興味を持っていましたか。1から5までの尺度で判断してください^{注11}。平均3.71 SD 1.07
7. 6番の質問に「あった」と答えた人は何に興味を持っていたかを具体的に書いてください。後述
8. 当プログラム参加後に日本語および文化に対して興味が深まりましたか。1から5までの尺度で判断してください^{注12}。平均4.28 SD 0.76
9. 日本語授業に参加するにあたって何を一番学びたかったのですか。できるだけ書いてください。(例：挨拶，文法，語彙，日本文化など)後述
10. 当プログラムの内容は理解できたかどうか。1から5までの尺度で判断してください^{注13}。平均4.00 SD 0.925
11. 当プログラムの内容の難易度を1から5までの尺度で判断してください^{注14}。平均3.14 SD 0.71
12. 内容分量の評価を1から5までの尺度で判断してください^{注15}。平均3.67 SD0.713
13. 指定された時間に見たかどうか はい 14名 いいえ 7名
14. (13問)その理由を教えてください 後述
15. 1コマ一つずつ一度に全部見たかどうか はい15名 いいえ 6名
16. ロシア語テロップの量を1から5までの尺度で判断してください^{注16}。平均2.90 SD 0.889
17. 教師発話スピードはどうでしたか。1から5までの尺度で判断してください^{注17}。平均2.90 SD 0.610
18. 画質が落ちたのが気になりましたか いいえ 21名 「はい」は無し
19. どの内容が一番役に立ちそうだと思いますか。後述
(例：文法，大学紹介，日本語の会話例等々)
20. 授業の今後の内容としてどの内容があれば役に立つと思いますか。後述
(例：日本文化，日本生活紹介，日本人との会話例等々)

21. 授業が終わった後、日本語の勉強を続けたいと思いましたか。 はい 20名 いいえ 1名
22. 課題を1から5までの尺度で判断してください^{注18}。平均 3.10 SD 0.750

IV. 考察

回答数が少ないので確実なことは言いにくい³が、どのような教材が求められているかについての多少の示唆が得られたように思われる。

【教材の提示の仕方】

まず、決められた時間に学習したか、好きな時間に学習したか(問い13)であるが、3分の2の学生は決められた時間に学習している。問い9でその理由を聞いた³が、答えた15人のうち、「スケジュールに従った」(4人)、「責任があった」(2人)と答えていることから、事前に詳細な時間割を配布していたため、時間通りに受けるべきであると考えたからかも知れない。ただ、時間通りに見ていないと回答した7人のうち5人^{注19}は「用事」と回答していて、やはりオンデマンド方式の方が良いように思われる。

教材を1つにまとめてアップロードするか分割するべきかについては、決められた時間に受けた学生も好きな時間に見たものも一度で見たものが多かった(問い15)³、およそ3割が分けてみている。今回は30分前後の教材だったが、今後内容を増やす場合には、やはり分割してのアップロードがよいだろう。

教材の画質について(問い18)は、教材作成の段階で非常に画質が悪くなり学生の反応が心配だったが、画質が気になる学生は一人もいなかった。筆者らが気にしていたほど画質には拘っていないようであった。

【教材の内容】

問い6から参加者は皆、受講前から日本についての興味があったことが窺える。その分類(問い7)としては、ほとんどの学生が日本の現代および伝統文化、日本の社会を挙げている。日本語そのものより、やはり文化への興味が強いようである。従って、教材には日本社会や文化の内容を上手く取り入れたものが不可欠だろう^{注20}。問い9は、この「日本語授業」で何を期待していたかを聞いたものだが、日本語だけでなく、日本文化、社会を挙げた人も半数近くいたこともそれを証明している。

問い19で、授業のどの部分が役に立ちそうか聞いた³が、日常会話と答えたものが21名中はほぼ半数の10名、自己紹介も含めると13名が、会話が役に立つと答えている。また「全部」と答えたものも6名いた。文法・語彙をあげたものは4名であった。やはり学習者は習ったことを実際に使いたいと思っているようである^{注21}。従って、習った構

文や語彙をどのように使うか、一つ二つの会話例でなく、様々な場面を応用例として上げていくことが必要になるだろう。

問い20は、今後どのような内容のものを取り上げて欲しいかを聞いているが、やはり多くの学生が「日常会話」(11名)をあげている。また「日常生活」(13名。自由回答なので複数回答可である)も会話同様に多い。

以上から、教材の内容としては、会話例や日本の生活の紹介などを強く求めていることが分かる。今後は、今回のものにさらに応用会話例、それも日常生活の様子が分かるような内容で提示していくことが重要になるだろう。

【全体評価】

問い8(日本語および日本文化についての理解が深まったか)、問い10(プログラムの内容が理解できたか)、問い21(今後も日本語の勉強を続けたいか)を見る限り、日本語の仕組みを理解し、日本語や日本に関する興味が深まったと言えるだろう。当初に設定したプログラムの目標は達成できたと言って良いと言えるのではないだろうか。

おわりに

理系の学生を中心としたプログラムでも、ほぼすべての学習者は日本語や日本文化に興味を持っていて、この種のプログラムを今後さらに他の地域に拡大する場合にも日本語学習がぜひ必要であることが確認出来たと言える。また、彼らは日本語そのものについてより、日本の生活や文化により多くの興味をもっていて、教材には日本の日常生活の様子がよく分かる動画や、学んだ文法や語彙を使った応用会話例を多く提示すべきであることが示唆されたと言える。

新型コロナウイルスによる感染症がいつ収束するかは未だ不明である。収束した暁にはプログラム受講者は晴れて来日し、留学を満喫することであろう。しかしながら、オンデマンド用の教材は、来日前および来日後の教育プログラムとして使うことも可能で、今後もその必要性は大きくなることはあっても小さくなることはないであろう。

最後に報告の趣旨とははずれるが、今後もコロナ禍が数年続くと想定した場合の懸念を述べたい。今回のプログラムは来日を予定していたのにそれが出来なくなり、急遽オンデマンド方式で開講したものである。今後この状態が続き、次回以降もオンデマンド教材をそのまま使用することになった場合、非常勤講師は本来なら得られるべき謝金を得られなくなる。非常勤講師の謝金のみで生計を立てている教員にとっては死活問題であり、このことを非常に憂慮している教員がいることを述べてこの報告を終えたい。

【注】

- 1 金沢大学国際機構
- 2 金沢大学国際機構非常勤講師
- 3 金沢大学人間社会環境研究科博士課程前期
- 4 1 コマは90分の授業である。
- 5 結局、2月に行われるはずであったプログラムも中止となった。
- 6 このような短期プログラムは今後増えていくことが予想される。実際に金沢大学国際機構の主要業務として、半年より短い「超短期プログラム」開発が研究課題として与えられている。もちろん、留学である以上対面型のプログラムが中心となるが、新型コロナウイルスによる混乱の収束が長引く場合もあり得るので、このような報告にも意義があると考えた。また、遠隔用教材は、今後の短期プログラムの実施前や実施後の研修にも使用することができる。
- 7 参加大学はモスクワ国立大学、サンクトペテルブルク国立大学、カザン連邦大学、国立イルクーツク大学、国立アルタイ大学、極東連邦大学の六大学。これらの大学間の時差は最大約7時間になる。
- 8 金沢大学では2020年度春学期はすべて遠隔で授業を行うことになった。秋学期からは基本対面方式で行われるように変更されたが、国際機構の総合日本語プログラムは、来日出来ない留学生にも遠隔で授業を提供しなければならないため、秋学期も原則遠隔での授業となった。
- 9 ClipChampを使用した。<https://app.clipchamp.com/>
- 10 しかしながら、アンケートの結果は教材をあまり繰り返し視聴しなかったようである。
- 11 目盛基準：「非常にあった」(5)；「全くなかった」(1)
- 12 目盛基準：「非常に深まった」(5)；「全く深まらなかった」(1)
- 13 目盛基準：「全部理解できた」(5)；「全く理解できなかった」(1)
- 14 目盛基準：「非常に易しかった」(5)；「非常に難しかった」(1)
- 15 目盛基準：「多すぎた」(5)；「少なすぎた」(1)
- 16 目盛基準：「多かった」(5)；「少なかった」(1)
- 17 目盛基準：「遅かった」(5)；「速かった」(1)
- 18 目盛基準：「非常に易しかった」(5)；「非常に難しかった」(1)
- 19 残りの二人は、「接続環境が安定していない」と「時差」であった。
- 20 2018年2月に金沢大学で行った3週間のロシア文化交流プログラムでは、初中級用の日本語教科書として、金沢の伝統文化や現代日本社会を題材にした教材を作成している(非公開)。金沢大学の行う他の短期プログラムでも、プログラム用の特別日本語研修を用意する場合には常に日本語と日本文化をセットとする考え方で教材を作成している。
- 21 この時点では、実際に来日することが想定されていたので余計にそう感じられたことであろう。

Report on the Elementary Japanese Course of the Japan-Russia Ecotourism Program at Kanazawa University

MINE Masashi, YAMADA Akemi, Viktoriia Vovk

Abstract

Due to the coronavirus, elementary Japanese language training in the Russian Cultural Exchange Program at Kanazawa University was forced to change from face-to-face classes to remote on-demand courses where teacher-student interactions were reduced significantly. This paper reports on the changes this influenced in terms of program policy, problems regarding the preparation and implementation of program materials, the results of evaluation questionnaires after program implementation, and their analysis. The survey showed that, despite the on-demand format, many learners participated in the course in accordance with the program schedule. In addition, although it was originally an ecology learning program, many learners are interested in the Japanese language and Japanese culture, and the necessity of learning Japanese in this program was confirmed. It was suggested that the contents of the teaching materials should include many videos and conversation examples that clearly convey the realities of daily life in Japan.